

# 佛心

二〇二二年三月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



如来の光明  
母の膝上

無碍光如来の名号と  
かの光明智相とは  
無明長夜の闇を破し  
衆生の志願をみてたまふ

私たちは普段からさまざまなお話を聞き、さまざまなお話を聞きながら、この人生を送っており、そのなかで何を聞き、誰と出会ってきたかによってその後の生き方が大きく変化していきます。

例えば、学校に通い始めれば友人や先生といった人と出会いますし、社会人になれば同僚や新しい上司との出会いもあります。私自身も偶然という言葉では片付けきれない出会い

が多々ありました。大学生だったときに青木先生と出会ってなければカナダ開教区に着任することはないかと思う。また約5年のあいだ公私共にお世話になった寺本先生と出会ってなければ開教使にすらなっていないかと思えます。人との出会いによって今後の人生がガラリと変わった経験があるのは私だけではないと思います。

このことについて改めて考えてみると、私たちの人生を変える一番身近な存在というのは、親や兄弟といった家族ではないでしょうか。

家族と共に過ごした時間というのは、どんな思い出よりもずっとこのろの中に残ってくるものだと思います。私も家族とのいろいろな思い出があります。その中でも一番古くかつ鮮明に覚えているのは、毎晩寝る前に家族全員で称えていた正信偈や重誓偈の時間です。

正信偈はわずか六二行、百二十句の短い偈文ではありますが、当時の

私にとっては長いこと正座をしなければならぬ少しい時間でもありました。正座をすること僅か十分ぐらいでしょうか、痛くなった足をこすっていますと、それを見た母親が私をひざの上に抱きかかえて一緒に称えてくれました。

私はまだ文字が読めませんでした。ですから偈文をなぞる母親の指をじつと見つめながら正信偈を耳にしたのです。そしていつの間にか上手く発音できないながらも両親や兄弟と一緒に称えられるようになっていきました。

そして今もその「正信偈」を称えていますと、ふとしたときにそのときの情景が目の前に浮かぶことさえあります。

正信偈には、阿弥陀如来のおはたらきが書き示されています。そのおはたらきは十二種類の光として表されおられます。先程いただきました御和讃の「無碍光」もその内のひとつです。

自然界の現象で、光を忌み嫌うものはありません。草木は光にむかって枝や葉をのびし、鳥は光をたのしむかのように羽をひろげて飛びたち

ます。しかしここでいう仏様の光とは、太陽や月の光、懐中電灯の光などといった物質的な光ではありません。

物質的なものというのは、必ず二つの条件に制約されるといわれています。その二つの内の一つは壊れるということであり、もう一つは物に障えられるということです。もし仏様の光が、そういう壊れたり、遮られるものであったならば、私たちの永遠のよりどころにはなりません。

では、私たちがよりどころとしている仏様の光とはどういったものなのでしょう。親鸞聖人は正信偈の中で阿弥陀如来の光とは、私たちが眼で見る光ではなく、『聞く光』であると書かれています。また聖人は、仏様の光明は「智慧のかたちなり」ともいわれています。

その智慧のかたちとは、長い短いやといったかたちではなく、智慧のすがたという意味です。それを具体的にいうと、つまりお念仏であり、そのお念仏のいわれを明かしたみ教えのことです。その光はわたしたち自身を照らし、もう一方では私たちの

救いの道を照らしだして下さります。そして、そうしたみ教えやお念仏を聞いていることが、阿弥陀如来の光明に照らされていることなのです。

浄土真宗では、人としての「いち」を生きていく中に、聞くべきことを聞き、遇うべきものと遇わせていただいた人生こそが、お念仏の人生であると聞かせていただきます。

私たちはこの世に生まれて来たからといって新聞に取り上げられるような有名人でもエリートでもございません。人からとれば取るに足らない人生だったかもしれない。しかし、そのような生涯であったとしても私にとつては二度と再び訪れることのない掛け替えのない人生なのです。

そのような人生の中で聞かなければならないものは、聞かせいただきまし。遇わなければならぬものに遇わせていただきまし。と合掌して「南無阿弥陀仏」の声を聞く生涯を送りたいものです。

私もさまざまな人と出会い、多くのことを聞くなかで、この人生にもいろいろな変化が無自覚のうちに起きていたのだと思います。それでも幼いとき

に家族と一緒に称えた「正信偈」とお名号だけは、いつまでも私の耳に残り、ふとしたときにこの口から出てきます。

そして「南無阿弥陀仏」を称えるとき、父の声や母のおもかげがほうふつと浮かんでくるのです。それは阿弥陀如来の本願が私の上へ届き、まさしく「聞く光」として今ここではたらいっているすがたであります。合掌

トロント仏教会 駐在開教使

大内祐真

## 「日本語法座」

**祥月法要 3月6日(日曜日)**

時間：午後1時～ (日本語)

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に会い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。



**春季彼岸会 2月20日(日曜日)**

時間：午後11時～ (TBC年次総会のため両カ国語で行います)

しゅんきひがんえ

## 春季彼岸会

日時：2022年2月20日(日曜日) 午前11時(英語と日本語)

トロント仏教会では今月の第三日曜日(20日)11時よりお彼岸の法要を勤修します。「彼岸」とは、季節を表す言葉ではなく、「お浄土」を表す仏教用語です。私たちの住む現実の世界「此岸」から、阿弥陀さまの極楽浄土「彼岸」へ到る道を探っていくことが本来の意味であります。そのため、春と秋の二度、真西に沈みゆく太陽に手を合わせ礼拝したのが、お彼岸法要の起源といわれています。

どなた様もお彼岸のご縁にぜひお参り下さい。

※今年はTBC年次総会と日が重なっているため、  
英語と日本語の両カ国で行います。

